

<論文>文末の「ンジャナイ(力)」の語用的機能

著者名(日)	三角 友子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	6
ページ	17-34
発行年	2000-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000344/

文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能¹

三角 友子

Remarks on the Pragmatic Function of the Sentence Final “NJANAI(KA)”

Tomoko Misumi

This paper argues that in the Japanese language, the sentence final form “NJANAI(KA)” has four different pragmatic interpretations: 1) the speaker intends to negate a particular proposition asserted by hearer which is contradictory to the speaker’s initial presupposition; 2) the speaker admit or support a particular proposition newly asserted by the hearer, which contradicts the speaker’s previous presupposition; 3) the speaker intend to show his/her negative attitude toward a particular proposition asserted by the hearer and 4) the speaker intends to imply that he/she is not confident enough of the validity of the statement which he/she has made.

【キーワード】 文末の「ンジャナイ(カ)」・否定疑問文・話者命題による聞き手命題の否定

1. はじめに

文末の「ンジャナイ(カ)」は、話者の推定や不確かな判断を示す固定形式として使用される一方で、極めて「ノ(ン)+ダ」の否定疑問形式「ンジャナイ(ノ)カ」に似た語用的機能を持つ場合がある。次の例文 (1) (2) は否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」の例である。

言語科学研究第6号(2000年)

- (1) (一向に生活態度を変えようとし[↓]ない相手に対して)
君は生き方を変えようと思[↓]ったんじゃないのか。(↓)『君と出逢ってから』
- (2) (話し手は、聞き手がもう塾へ通[↓]ってると思[↓]っていた。しかし、聞き手が「塾へ行[↓]っていない」というので)
ソウカ、塾へ行[↓]ってるんじゃない(の)か。(↓) (筆者作例)

※(↓)は下降音調を示す。太字はプロミネンスを示す。

上の例文 (1) で話者は、「(聞き手は) 生き方を変えようと思[↓]っている」と信じていたにもかかわらず、それが否定されるような状況に出くわしている。しかし、話者は状況がにわかには信じられないことから話者の既存命題を真とし、状況の示す命題を否定しようとしている。一方、例文 (2) のような否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」では、話者は聞き手の示す否定命題「塾へ行[↓]っていない」の方を真とし、話者の既存命題「塾へ通[↓]っている」を否定している。

このように話者命題が状況 (聞き手) が示す命題を否定したり、逆に肯定したりする関係は、否定の意味のない文末の「ンジャナイ(カ)」形式にも見られる。次の例文 (3) は、話者が聞き手の命題を否定する「ンジャナイ(カ)」の例、そして、例文 (4) は話者が聞き手の命題を肯定する「ンジャナイ(カ)」の例である。

- (3) (作りすぎた餃子の処分を考えているかや乃、レイ子、きみえ。隣の住人が出産したのを思いだし、出産祝いとして餃子を持っていくことをレイ子が思いつく。しかし、きみえは乗り気ではない)
レイ子：キレイに持っていけば平気よ。
きみえ： えー、だって普通の家だったらいいけどさ、めでたいところにギョーザ・・・。
(中略)
レイ子： きれいにねえ、ラッピングしていけば大丈夫よ。のしつけて持っていけばいいんじゃない。(↓)
きみえ： えー、だって。 『やっぱり猫が好き』

※(↓)は下降音調を示す。

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能

- (4) (悪魔の格好をしている歌手Dが自分の大学時代のことについて話そうとした時、司会者Kが割り込んで)

D：我輩が世を忍ぶ仮の姿で、人間の大学に潜入していたときに、

K：それも早稲田ですからね。

D：ああ知ってんじゃないよ。 『ごきげんよう』

上の例文 (3) では、「レイ子」は、「餃子を出産祝いにする」ことに賛成である。それに対して、「きみえ」は、「普通の家だったらいいけどさ、めでたいところにギョーザ」と反対している。そこで、「レイ子」は「のしをつけて持っていけばいい」という表現で、「きみえ」の示す命題を否定している。一方、例文 (4) では、話者Dは聞き手Kが自分の出身校を知っていたとは思っていなかった。聞き手が示す「出身校を知っている」という命題は話し手の既存命題を否定するものであったが、話者Dはそれを認めている。

このように上の例文 (3) (4) で示した文末の「ンジャナイ(カ)」は、先行する聞き手命題を否定するという点において否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」とよく似た語用的機能を持っている。そして、これは、次の例文 (5) で示すような推定の「ンジャナイ(カ)」と異なるところでもある。

- (5) (餃子を何個作るのかと聞かれて)

えーと、一人30個アタマで90個あればいいんじゃない。(↑)

『やっぱり猫が好き』

※(↑)は上昇音調を示す。

上の例文(5)は、質問に対する話者の確信のない答えを示しているだけである。話者の命題や状況が示す命題を否定する働きはない。

しかし、同じ上昇音調の「ンジャナイ(カ)」であっても、次の例文 (6) の「ンジャナイ(カ)」には聞き手命題を否定する働きが見られる。

- (6) (レイ子は、何でも願いを叶えるという「猿の手」に向かって願をかけている。)

レイ子：猿の手。猿の手を百個ださい。猿の手百個。猿の手百個。

言語科学研究第6号(2000年)

レイ子：・・・(きょとんとした様子)

かや乃： ちょっと欲張りすぎなんじゃない。(↑) 『やっぱり猫が好き』

※(↑)は上昇音調を示す。

上の例文 (6) の「ちょっと欲張りすぎなんじゃない」には、聞き手のレイ子を否定する意図がうかがえる。否定の力は例文 (2) (3) に比べ弱いものの、例文 (5) とは異なる話者と聞き手の緊張関係が存在している。

このように文末の「ンジャナイ(カ)」は、語用的機能が多岐にわたるため、日本語教育においては運用例を提示するのが難しい形式となっている。そこで、本稿では、話者命題による聞き手命題の否定という観点から、文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能を分析する。

2. 先行研究

田野村 (1988)、森山 (1989a)、安達 (1991)、鄭 (1994)、蓮沼 (1993) などの先行研究では、文末の「ンジャナイ(カ)」は、「ダロウ」「ネ」などともに情報伝達機能という観点から分析されている。しかし、これらの研究では、文末の「ンジャナイ(カ)」と「ジャナイ(カ)」を分けずに分析をしているため、「ンジャナイ(カ)」単独の機能に関する研究が少ない。

次節では、まず一連の研究の端緒に当る田野村(1988)の「(ン)ジャナイ(カ)」の分類を見ていく。次に「ンジャナイ(カ)」を独立した形式とした安達(1999)の分析を概観する。

2-1. 田野村 (1988) の分類とその問題点

田野村 (1988) の分析では、「ンジャナイ(カ)」は「名詞+ジャナイ(カ)」と同じ形式として分類されている。次の分類は、田野村 (1988) で示された否定の働きのない「ジャナイ(カ)」の一類と二類である。

一類

- (7) よう、山田じゃないか。
- (8) 何をする、危ないじゃないか。

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能

(9) 自分から言い出したんじゃないか。

二類

(10) (不審な様子から)どうもあの男犯人じゃないか？

(11) (空模様を見て)雨でも降るんじゃないか？

田野村 (1988) の一類の「ジャナイ(カ)」は、体言または用言に接続し、発見・驚き、非難・叱責、事態の認識要求などを示すとされている。音調は、「カ」が省略されている「ジャナイ」を除き、下降調である。二類の「ジャナイ(カ)」は、体言に接続し、推定の意味を表す。音調は上昇調とされている。

田野村 (1988) の分類の問題は、一類、二類の双方に「ンジャナイ(カ)」と「ジャナイ(カ)」が現れていることである。この分類では「ンジャナイ(カ)」と「ジャナイ(カ)」の意味機能の区別が付けられていない。例えば、上の例文 (8) で示した咄嗟に発話される叱責の「ジャナイ(カ)」文は、「ンジャナイ(カ)」で置き換えることはできない。

(12) 何をする、危ないじゃないか。

(田野村、1988:122)

(13) * 何をする、危ないんじゃないか。

(筆者作例)

上の例文 (12) は咄嗟に発話される文として適格であるが、例文 (13) のように文末を「ンジャナイ(カ)」で置き換えると不適格になってしまう。

次に、話者が聞き手の注意を喚起しながら談話を続けようとする時の「ジャナイ(カ)」も、「ンジャナイ(カ)」で置き換えることは出来ない。次の例文 (14) (15) はその例である。

(14) D：ピザの、あのピザペーストって売ってるじゃない。(↓)

K：ああ。

D：赤いやつ。

『ごきげんよう』

(15) S：ほら、病院に行ったときにこうやってさわれるじゃないですか。(↓)

K：喉とかね。

S：あれね、(以下略)

『ごきげんよう』

言語科学研究第6号(2000年)

※(↓)は下降音調を示す。

上の例文 (14) (15) の例文を「ンジャナイ(カ)」で置き換え、「*売っているんじゃない(↓)」「さわられるんじゃないですか(↓)」とすることはできない。

このように「*ンジャナイ(カ)」は、話し手が情報を多く握っており、聞き手がそれに気がついていないような文脈では「ジャナイ(カ)」と置きかえることはできず、両者が同じ意味機能を有するとは考えにくい。

しかしながら、田野村 (1988) 以降の「ジャナイ(カ)」の研究においてもこの分類に疑問を持つものは少なく、「ンジャナイ(カ)」と「ジャナイ(カ)」を区別して扱う研究は少なかった。次に述べる安達 (1999) は、その数少ない分析の一つである。

2-2. 安達 (1999) の「ンジャナイ(カ)」「ジャナイ(カ)」の分析

安達 (1999) は、「ジャナイ(カ)」と「ンジャナイ(カ)」それぞれが、名詞、動詞、形容詞に接続し、一見して形態的区別が可能であることから、両者を区別して情報伝達機能を分析している。

安達 (1999) は、「ンジャナイ(カ)」と「ジャナイ(カ)」の情報伝達機能の違いには、否定疑問文の持つ肯定の「傾き」、すなわち否定疑問文が肯定の答えを期待するという働きが関与していると見ている。安達 (1999) によると、「ジャナイ(カ)」の文の「傾き」は、聞き手情報に働きかけ、聞き手から肯定の応答を引き出す機能を持っているとされている。この結果、「ジャナイ(カ)」には疑問文の特徴である確認要求機能が生じていると安達 (1999) は見ている。一方、「ンジャナイ(カ)」の文では、「傾き」は話者情報に働きかけている。このため、文末の「ンジャナイ(カ)」は肯定の平叙文を提供する機能を有しているとされている。

以上の根拠から、安達 (1999) は「ンジャナイ(カ)」を「ジャナイ(カ)」とは独立した形式と考え、否定疑問文の含意が固定化した話者の不確かな判断を伝える形式と結論づけている。

以上、田野村 (1988)、安達 (1999) の研究における「ンジャナイ(カ)」の分析を見てきた。先行研究においては、「ジャナイ(カ)」の分析が中心で、「ンジャナイ(カ)」に関する分析は非常に少ない。従って、安達 (1999) の「ンジャナイ(カ)」の情報伝達機能

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能

に関する研究は貴重である。

また、安達 (1999) の研究は、「ンジャナイ(カ)」および「ジャナイ(カ)」が否定疑問文から派生した形式であることを指摘した点でも注目に値する。このことから、文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能を考察するに当たって、否定疑問文としての機能しか持たない「ンジャナイ(ノ)カ」を比較の一方とすることは適当であると思われる。

3. 否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」の語用的機能

3-1. 否定疑問文における話者命題と状況(聞き手)命題の相互否定関係

否定疑問文の語用的機能に「傾き (bias)」の問題がある。「傾き」というのは話者が否定文と肯定文のどちらの答えを多く期待するかということである。太田 (1980) によれば、否定疑問文は、多くの場合、話者の肯定の命題を信じる気持ちを前提として発せられるとされている。次の例文 (16a) (16b) は太田 (1980) の例である。

- (16) a. Are you going to George's party? (ジョージのパーティーに行きますか)
 b. Aren't you going to George's party?
 (ジョージのパーティーに行かないんですか)
 (太田、1980:624)

太田 (1980) は、例文 (16a) には「ジョージのパーティーに行く」という命題に対して中立的かあるいは「たぶん行かない」という話者の気持ちがあり、一方、(16b) には、「たぶん行く」という気持ちが含意されていると述べている。この太田 (1980) の指摘を言いかえれば、否定疑問文には、話者の既存命題を肯定し、それを否定する状況を否定する相互否定機能があるものと考えられる。

このような語用的機能は、次のLyons (1977) の記述からも考察される。以下は、否定疑問文が発せられる状況についてのLyons (1977) の説明である。

The speaker utters “Isn't the door open” rather than “Is the door open” because there is some conflict between his prior belief that *p* is true and present evidence which would tend to suggest that $\sim p$ is true. He questions $\sim p$ because

言語科学研究第6号(2000年)

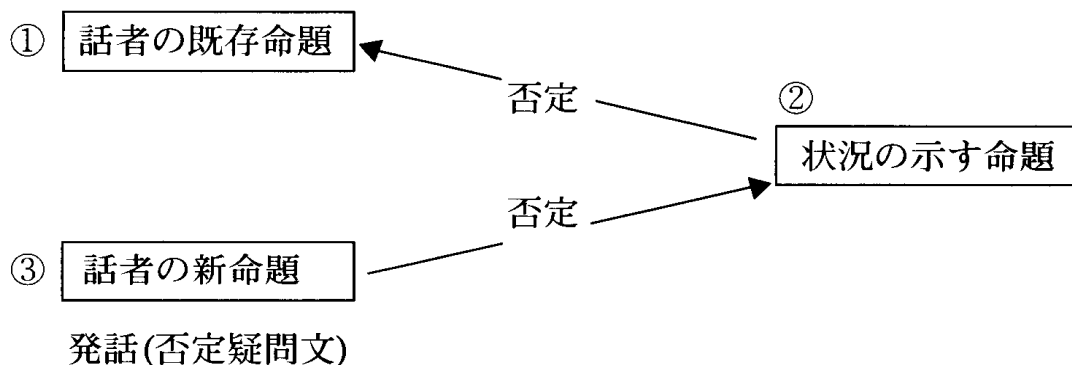
it is the negative proposition that occasions his doubt or surprise.

(話者は「ドアが開いていますか」より「ドアが開いていませんか」を発するのは、命題が真であるという話者の前々からの信念と、命題が真でないことを示唆するような状況証拠との間に軋轢があるからである。話者が否定命題を疑問視するのは、その否定命題が彼の疑いや驚きを生じさせたものだからである。[筆者訳])

Lyons (1977: 765)

上のLyons (1977) の指摘によれば、否定疑問文が発せられる状況には、まず話者の既存命題を否定する状況が存在する。そして、この否定関係を前提として、話者の新しい命題が状況の示す命題を否定するという新たな否定関係が生じるものと考えられる。この関係を図で示すと、次の (図1) のようになる。

(図1)



上の(図1)で示すように、①の話者の既存命題は②の状況の示す命題によって否定されている。次に②の状況が示す命題は、③の話者の新命題によって否定され、否定疑問文が発話される。上の(図1)の否定関係を次の例文(17)の場合で考えてみよう。

(17) (話者は、記憶をなくした誠二に好きだったコーヒーを勧めている。)

「誠二さん、コーヒー好きだったの思い出して。飲んでみません。(↑)(以下略)」

『君と出逢ってから』

※(↑)は上昇音調を示す。

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能

上の例文 (17) では、話者は「誠二」がコーヒーを好きだったことを知っていた。しかし、記憶をなくした「誠二」がコーヒーを飲まない恐れがある。従って、「誠二」がコーヒーを飲むだろうという話者の既存命題は状況によって否定されている。そこで、そのような否定的状況を否定したい話者は、「飲んでみません（↑）」という否定疑問文を選択していると考えられる。

上で見てきたように、否定疑問文では話者命題と状況が示す命題との間に相互否定関係が存在している。それでは、この関係は、否定疑問文「ンジャナイ（ノ）カ」においてはどのように現れているのであろうか。

3-2. 否定疑問文「ンジャナイ（ノ）カ」の語用的機能

「ノ（ン）＋ダ」の否定疑問形式「ンジャナイ（ノ）カ」においても、話者命題と状況（聞き手）が示す命題との間には相互否定関係が存在する。しかし、「ンジャナイ」の部分の話者の否定を示すものなのか、聞き手の否定を示すものなのかによって、前節（図1）で示した③から②への否定関係が生じない場合がある。この違いを次の例文（18）（20）で説明する。

まず、例文（18）は、前節（図1）で示した相互否定関係が生じる場合である。例文（18）は例文（1）の再掲である。

（18）＝（1）（一向に生活態度を変えようとしない聞き手に対して）

君は生き方を変えようと思ったんじゃないのか。（↓）『君と出逢ってから』

※太字はプロミネンスを示す

上の例文（18）の「[君は行き方を変えようと思った]んじゃない」は、話者による否定判断である。否定疑問文「ンジャナイ（ノ）カ」では、例文（18）のように否定命題が話者の否定を示す場合は、前節（図1）で示した二つの否定関係が成立する。この関係を、前節（図1）で示した「話者の既存命題」「状況（聞き手）が示す命題」「話者の新命題」の関係で示すと、次の（19）のようになる。

（19）① 話者の既存命題：聞き手は生き方を変えようと思っている。

② 状況（聞き手）が示す命題：聞き手は生き方を変えていない。

言語科学研究第6号(2000年)

③ 話者の新命題：「聞き手は生き方を変えていない」は偽である。

発話：「君は生き方を変えようと思ったんじゃないのか」(例文18)

上の発話過程において、(19-②) の状況 (聞き手) が示す否定命題は、(19-①) の話者の既存命題を否定している。また、(19-③) において、話者の新命題は状況が示す否定命題 (19-②) を否定している。このことから、話者命題と状況が示す命題の間には相互否定関係があることがわかる。

これに対して、次の例文 (20) における否定命題は聞き手が示した命題である。例文 (20) は例文 (2) の再掲である。

(20) = (2) (聞き手は、もう塾へ通ってると思っていたが、「塾へ行っていない」と言われて)

ソウカ、塾へ行ってるんじゃない(の)か。(↓) (筆者作例)

※ 太字はプロミネンスを示す。

上の例文 (20) の「塾へ行ってるんじゃない」は、「塾へ行っていない」という聞き手の命題を真とし、それを引用したものである。このような場合は、相互否定関係は生じない。この関係を上の (19) と同様に示すと次の(21)のようになる。

(21) ① 話者の既存命題：聞き手は塾へ通っている。

② 聞き手の命題：塾へは行っていない。

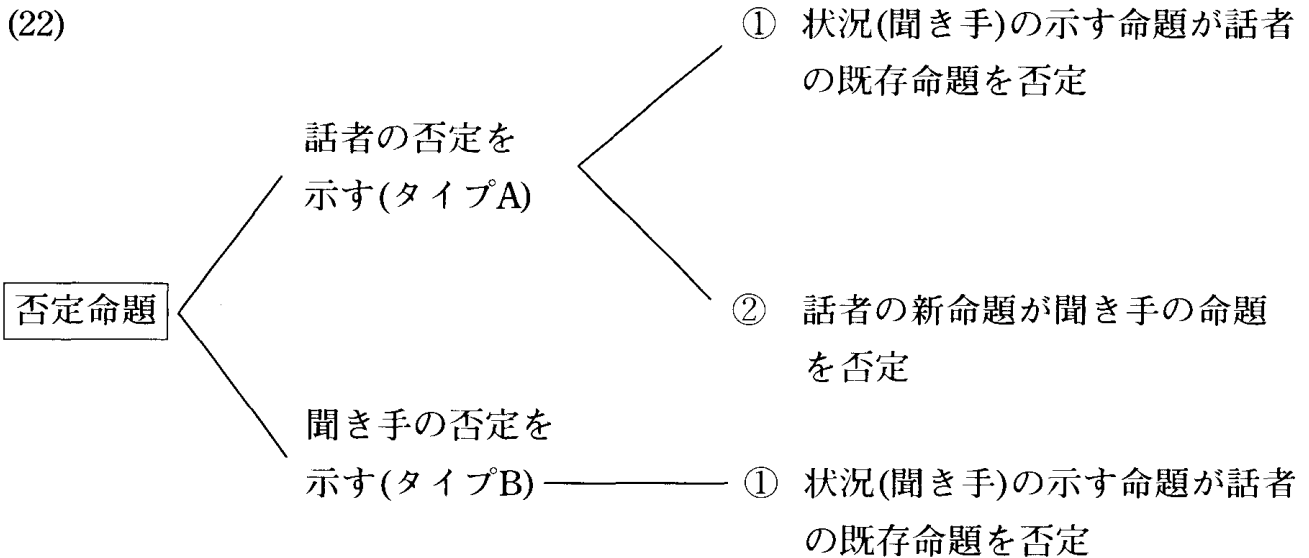
③ 話者の新命題：「聞き手は塾へ行っていない」は真である。

(既存命題の方を否定)

発話：「ソウカ、君は塾へ行ってるんじゃない(の)か」(例文20)

例文 (20) で話者は、上の(21-③)で示すように話者の既存命題の方を否定している。この点が例文 (18) と異なるところである。従って、否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」には次の (22) に示すような二種類の否定関係が考えられる。

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能



まず、タイプAでは、状況 (聞き手) の示す命題が話者の既存命題を否定し、話者の新命題が状況 (聞き手) の示す命題を否定している。従って、話者は状況 (聞き手) が示す命題を一貫して否定する態度を取っている。一方、タイプBでは、話者の新命題は聞き手命題を否定せず肯定するため、結果的に話者の新命題が話者の既存命題を否定することになる。

以上のことから、否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」では、前節で示した否定疑問文の相互否定関係の外に、話者が既存命題を否定し、聞き手命題を肯定するという関係も考えられる。それでは、このような否定疑問形式「ンジャナイ(ノ)カ」の否定関係は、文末の「ンジャナイ(カ)」にどのような影響を残しているのだろうか。

4. 文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能

文末の「ンジャナイ(カ)」形式には、否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」と同様に、話者命題と状況 (聞き手) が示す命題との間に相互否定関係がある場合とない場合がある。次の4-1では相互否定関係がある場合を、4-2では相互否定関係がない場合を見ていく。

4-1. 話者命題と聞き手命題の間に相互否定関係がある場合

「ンジャナイ(カ)」においても、次の例文 (23) で示すように、前節のタイプAと同じような相互否定関係が見られる。

言語科学研究第6号(2000年)

- (23) (きみえはフルート、レイ子はキーボードで演奏している。途中からかや乃もハープで加わる)
きみえ：うるさいな、ハープ。
(かや乃、うっとりとハープを弾き続ける。)
レイ子：お姉ちゃん、入ってこないでよ。
かや乃：なんでよ、アレンジしてんじゃないよ。 『やっぱり猫が好き』

上の会話 (23) で「かや乃」は、「うっとりとハープを弾き続ける」とあるように、「うまく演奏している」という既存命題を持っている。しかし、「きみえ」の「うるさいな、ハープ」、「レイ子」の「入ってこないでよ」という発話は、「(かや乃は)演奏が下手だ」ということを意味している。このことから話者命題と聞き手命題には否定関係があることが分かる。そして、「かや乃」の「なんでよ、アレンジしてんじゃないよ」という発話から、「かや乃」が聞き手の示す命題を否定し、既存命題を肯定していることがわかる。従って、この「ンジャナイ(カ)」は否定疑問文のタイプAの相互否定機能を有しているものと考えられる。

4-2. 話者の新命題が聞き手命題を否定しない場合

この文末の「ンジャナイ(カ)」は、否定疑問文のタイプBに相当する否定関係を有している。つまり、聞き手命題は話者の既存命題を否定するが、話者の新命題は聞き手命題を否定しない場合である。例文 (24) はこの例である。例文 (24)は、例文 (4)の再掲である。

- (24) = (4) (悪魔の格好をしている歌手Dが自分の大学時代のことについて話そうとした時、司会者Kが割り込んで)
D：我輩が世を忍ぶ仮の姿で、人間の大学に潜入していたときに、
K：それも早稲田ですからね。
D：ああ知ってんじゃないよ。
『ごきげんよう』

例文 (24) で話者Dは、KがDの出身校の名前を知っていたことに驚いている。この

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能

ことから、Dは「KがDの出身校を知らない」と思っていたことが考えられる。従って、話者の既存命題と聞き手命題は否定関係にある。しかし、Kの「知っている」という命題を話者Dは否定していない。これは、DがKの示す命題を真であると考えているからである。つまり、「ンジャナイ（カ）」の前の命題が、話者の命題ではなく聞き手の命題を示す場合は、話者の新命題と聞き手命題の間に否定関係は存在しないものと考えられる。

以上 4-1、4-2 で示した例は、前節のタイプA、タイプBと共通した否定機能を持つ例である。これらの「ンジャナイ（カ）」は、下降音調で発話されている点で否定疑問文の「ンジャナイ（ノ）カ」の音調とも一致している。

4-1、4-2に対し、次の 4-3、4-4で示す例では、話者の新命題と聞き手命題との否定関係が弱くなっている。

4-3. 話者の新命題と聞き手命題との否定関係が弱い場合

4-3 の「ンジャナイ（カ）」では、4-1、4-2 の「ンジャナイ（カ）」に見られるような話者の既存命題と聞き手命題の間の相互否定関係は存在しない。否定関係は、聞き手命題と話者の新命題との間にのみ見られる。次の例文 (25) を見てみよう。

(25) (真二は、涼子が偶然コンサート会場に現れた理由を考えている。)

真二： いや、この間、ライブ、来てたじゃん、涼子ちゃん。

南： ああ、まあ来てたよね。

真二： 来てたろう。来てたよね。

南： だから、何なのよ。

真二： (涼子は)俺に会いに来たのかな。

南： ライブ聞きに来たんじゃない。(↑) 『ロング・バケーション』

※(↑)は上昇音調を示す。

上の会話 (25) で、「涼子がをライブ聞きに来た」という発話は、その直前の真二の「俺に会いにきたのかな」といううぬぼれた推測を否定する意図で発せられたものと考えられる。しかし、先行文脈からは、南が、「涼子は、ライブを見に来ていた」ということに確信をもっていたことも、またそれが真二の「本当は俺に会いに来たのだ」

言語科学研究第6号(2000年)

という命題と矛盾する様子もはっきりとしない。従って、この文末の「ンジャナイ(カ)」では、3.2節の(22)の②で示した、話者の真命題が聞き手命題を否定する機能しか特定できないと考える。

また、4.3の「ンジャナイ(カ)」における聞き手命題と話者の真命題の否定関係は弱いものである。これは、「ンジャナイ(カ)」文が上昇音調で発話され、話者の否定判断が弱められるためと考えられる。ここでは、聞き手命題を否定するというよりは、むしろ、否定を抑制し、聞き手との対立を回避するという意図の方が意識されていると考えられる。

否定を抑制する「ンジャナイ(カ)」は、下の例文(26)で示すような発話状況では、婉曲さを示す形式と解釈することも可能である。

(26) (女性Wは、自分は車の運転が下手だという話をしている。)

W： なんかさあ、うわってなったときに、あ違うなあ、困ったときに余計それをひどくしちゃうような傾向があるでしょ、私って。いたいところをわざと痛いと擦って見たりする。

M： そうそうそうそう、そういうようなところ。

W： わからないけど、あおられるって言うんでもないんだけど(・・・沈黙)

M： あおられているのに気づいてないんじゃない。(↑)

W： え？気づいてないん、っていうか、何？焦っちゃうの。

(談話資料5)

※(↑)は上昇音調を示す。

上の会話(26)において、女性は「あおられるって言うんでもないんだけど」と述べていることから、「あおられていない」と考えている。一方、男性Mは、「あおられているのに気づかないから、気がついた時にはパニックに陥っている」と考え、「あおられていない」という女性の命題を否定する判断を婉曲に述べている。

上で見てきたように、4.3の「ンジャナイ(カ)」には、話者命題と聞き手命題の間に相互否定関係はないが、話者の新命題が聞き手命題を否定する機能は見られる。しかし、次の4.4で述べる「ンジャナイ(カ)」にはこのような否定関係は見られない。

文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能

4-4. 話者命題と聞き手命題に否定関係がない場合

4-4で示す「ンジャナイ(カ)」には、話者命題と聞き手命題の間に否定関係は見られない。この「ンジャナイ(カ)」は、例文(27)で示すように、話者の確信度の低い判断を示す形式と考えられる。例文(27)は例文(5)の再掲である。

- (27) = (5) (かや乃、レイ子、きみえ。三人せっせと餃子の皮に具を包んでいる)
 きみえ：何個くらい作るの？これ
 かや乃：えーと、一人30個アタマで90個あればいいんじゃない。(↑)
 『やっぱり猫が好き』
 (↑)は上昇音調を示す。

上の例文(27)は、「かや乃」が即座に判断した内容を伝えている。このような「ンジャナイ(カ)」は、先行研究で指摘されている「推定」(田野村、1988)や「不確実な判断」(安達、1999)を示すものであると考える。

以上、4-3、4-4を見てきた。4-3の「ンジャナイ(カ)」は、話者の新命題が聞き手の命題を否定するという機能が弱まっている。これは、4-1の「ンジャナイ(カ)」と大きく異なる点である。この要因には、4-3の「ンジャナイ(カ)」文が上昇音調で発話されていることが考えられる。上昇音調で発話されることで否定判断が保留され、その結果4-1に比べ4-3の「ンジャナイ(カ)」では否定判断が抑制されているものと考えられる。そして、4-4の「ンジャナイ(カ)」は、4-3の「ンジャナイ(カ)」の否定判断が最も弱まった形式と考えられる。

5. 結論—「ンジャナイ(カ)」の語用的機能

文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能について、話者命題による聞き手の命題の否定という観点から考察した。文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能は、この否定関係から次のように分類される。

まず、「ンジャナイ(カ)」には、否定疑問文「ンジャナイ(ノ)カ」の語用的機能と共通する機能、すなわち、話者の既存命題と聞き手命題が対立する状況において、(1)「ンジャナイ(カ)」で示される話者の新命題が聞き手命題を否定する機能を有する場合

言語科学研究第6号(2000年)

と、反対に(2)話者の新命題が聞き手命題を肯定する機能を有する場合がある。そして、このような機能を有する「ンジャナイ(カ)」は、下降音調で発話されるという音声的特徴を持っている。

次に、(3)先行する聞き手命題に対して話者の弱い否定判断を示す「ンジャナイ(カ)」がある。これは、話者の否定判断を抑制する態度を示す形式と考えられる。この他に、(4)話者の命題と聞き手の命題の間に否定関係はなく、命題に対する低い確信度を示す「ンジャナイ(カ)」もある。これは文脈に関わらず、話者の不確かな判断を示す形式として使用されているものと考ええる。これらの「ンジャナイ(カ)」は、上昇音調で発話されるという音声的特徴を持っている。

上で述べた否定機能は、否定疑問文「ンジャンイ(ノ)カ」が有する語用的機能から派生し、「ンジャナイ(ノ)カ」と同じような相互否定機能を有する(1)(2)の「ンジャナイ(カ)」から、弱い否定判断を示す(3)の「ンジャナイ(カ)」へ、そして否定判断の無い(4)へと次第に進んできたものと考ええる。その要因としては、下降音調と上昇音調の違いや、否定辞ナイの働きが命題ではなく、話者の否定態度に及んでいることなどが考えられるがこれらの仮説はさらに検討を要する。

6. おわりに

本稿では、文末の「ンジャナイ(カ)」が、否定疑問文「ンジャンイ(ノ)カ」の語用的機能、すなわち、話者命題と聞き手の命題の相互否定機能をプロトタイプとして、「ンジャナイ(カ)」に4つの否定解釈が生まれることを指摘した。日本語教育において「ンジャナイ(カ)」形式を指導する際には、このような特徴を反映させた談話文脈を用意すべきであると筆者は考える。形式的な意味の分析だけでなく、語用的機能に着目し研究することは、今後の日本語教育にとっても必要な試みである。

<注>

1. 「ンジャナイ(カ)」は「ノデハナイカ」の会話体であるが、「ジャナイ(カ)」と比較するために実際に談話で使われる「ンジャナイ(カ)」の方を使用する。また、本稿で示す「ンジャナイ(カ)」は、「ンジャナイ(カ)」「ンジャナイ」「ンジャン」「ンジャナイデスカ」を総称する呼び方とする。

文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能

<引用文献>

- Lyons, John. (1977). *Semantics 2*. Cambridge University Press.
- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- (安達太郎 (1992) 『『傾き』を持つ疑問文—情報要求文から情報提供文へ—』『日本語教育』77号 pp. 49-61
- 太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152 国語学会 pp.109 - 123
- 鄭 相哲 (1995) 「ネとダロウとジャナイカー確認要求形式」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)』pp.263-274
- 鄭 相哲 (1994) 「所謂確認要求のジャナイカとダロウ—情報伝達・機能論的な観点から—」『現代日本語研究』第1号大阪大学文学部日本語学講座 pp.27 - 39
- 蓮沼 (1993) 「日本語の談話マーカー『だろう』『じゃないか』の機能—共通認識喚起の用法を中心に—」『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』pp.39 - 57
- 森山卓郎(1989a)「コミュニケーションにおける聞き手情報・聞き手情報配慮・非配慮の理論」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp.98-120

<参考文献>

- Givon, Talmy. (1979). *On understanding grammar*. Academic Press.
- Kuno, Susumu. (1973). *The Structure of Japanese Language*. The Massachusetts Institute of Technology.
- McGloin, Naomi, Hanaoka. (1986). *Negation in Japanese*. USA & Canada: Boreal Scholarly Publishers and Distributions.
- Leech, Geoffrey. (1983). *Principles of Pragmatics*. Longman.
- 安達太郎 (1991) 「いわゆる「確認要求の疑問表現」について」『大阪大学日本学報』10 pp. 45 - 60
- 久野 暁 (1983) 『新日本文法研究』大修館
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』くろしお出版
- 須藤和朗 (1999) 「日本語の文末表現形式『のだ』の語用的機能についての考察」神田外語大学言語科学研究科提出修士論文

<用例の出典>

- (1) 北川悦吏子 (1996) 『ロング・バケーション』角川書店
- (2) 吉田紀子 (1996) 『君と出逢ってから』ワニブックス
- (3) もたいまさこ・室井滋・小林聡美(1998) 『やっぱり猫が好き』幻冬社
- (4) フジテレビ「ごきげんよう」(1997年6月11日放送分)
- (5) レストランにおける男女の会話 (田坂敦子所有 録音日時不明)

言語科学研究第6号(2000年)

＜付記＞ 本稿は、1999年1月に神田外語大学大学院言語科学研究科に提出した修士論文「文末の「(ン) ジャナイ (カ) の意味と語用に関する一考察」の一部を再考察したものです。本稿の考察にあたり、石黒圭さん(一橋大学留学生センター)、鈴木武生さん(東京大学大学院)より貴重なご助言をいただきました。また、執筆にあたり、徳永美咲先生(神田外語大学元教授)、須藤和朗君(神田外語大学)にご助言いただきました。心より御礼申し上げます。